

夜の梅　　試衛館青春草子

「却って良かったと思いますよ」

山南敬助が土方歳三の耳元で、そう囁いた。
文久二年一月二十五日。

暮れも押し詰まったその日の昼さがり、江戸は市谷甲良屋敷・天然理心流道場試衛館に、道場主の近藤勇の幕府講武所教授方お取立ての話が流れたという報せが届いた。

講武所とは、安政年間に列強の軍装に刺激を受けた幕府が、築地に作った操練所を改組して、万延元年に神田小川町に置いた旗本御家人などの子弟に剣術をはじめ槍術、弓術、砲術などの武術を教える学校のようなものだ。

身分制度が崩れかけたこの時代、教授には実力のある者をと、広く野に人材求めていた。文久二年のこの年の秋、剣術の教授の席の一つ空きができたとか。

その噂を漏れ聞いて近藤は、自分ほどの力量があれば、講武所の教授になる資格は充分あると、大いにその気になったようだ。が、自分では何もしない。午後の稽古が済んだ後、皆が去った道場で、晩秋の庭に咲く野菊の花を眺めながら、幼馴染の土方に、

「講武所の剣術教授、募集しているようだな」

何気なく一言、そう呟いただけだった。

なりたいたいとも、そのためにどうして欲しいとも何とも言わない。

子供の頃から、そうだった。

近藤は興味を示すだけでいい。それだけで、後は土方が、何でも手に入れてくれた。いや、大方の場合土方は、近藤が興味を示す前に動いた。

講武所の剣術教授の話も、近藤が呟くより半月も前に、もう既に土方は、日野宿の名主である姉婿の佐藤彦五郎の伝手を頼って内々に動いていた。

それが、近藤の呟きを機に、本格的に、おっぴらに、活動しだした。

そして、土方の運動が功を奏して、先月の末にやつとの事でほぼ内定し、後は年が明けから、正式に任命されるのを待つだけだった。

その話が俄かに流れたというのだ。

試衛館を訪ねて来た姉婿を見たとき、土方は

姉上の身に何かあったか

と思った。それほどに、彦五郎は疲れ果てた様子だった。

母屋の座敷に通されて、近藤を前におずおずと話す彦五郎の口から、講武所剣術教授の話が流れたことを聞かされた土方は、

「何故ですか！」

前日には使者に対して自分と同じ事をしたであろう彦五郎に、お門違いとは重々承知で、激しく食って掛かった。

義弟の勢いに気圧されながら、彦五郎は、「多分、近藤さんの出自がばれたんだと思う」

言いにくそうにそう言って、悔しそうに唇をかんだ。

近藤の出自……

近藤は生まれながらの武士ではない。多摩上石原村の豪農・宮川家の三男として生まれた。

宮川家は、貧乏道場・試衛館に比べればはるかに裕福な豪農だ。とはいえ、身分制度から言えば、士農工商の農、百姓だ。その宮川家の三男が、天然理心流に入門してその技量を認められ、子のない先代に請われ、養子に入り近藤家を継いだ。

今は近藤家の当主。天然理心流道場試衛館の道場主だ。武士だと言うならそういえる。が、変えることのできない出自が、いつまでも付いて回るのだ。

幕府のお偉いさん方は、講武所の教授方を身分を問わず広く野に求めると言っているが、許容範囲は、比較的最近碌を離れた浪人まで。百姓身分の者など、初めから考えの中になかったに違いない。いくら実力第一とはいえ、旗本のお坊ちゃん方が百姓上がり人間から物を教わるなど、とんでもないことなのだろう。

「そんな・・・」

土方は、絶句した。

彦五郎の懇意にしている宿場役人から、三河以来の名門御家人、旗本、大身旗本、伝手を辿って担当の老中まで、順番に挨拶に向かいだした。

勿論手ぶらではない。

手土産の菓子折りには、それ相応の山吹色の菓子をつめた。

言うまでもなく試衛館には、何処を探してもそんなものはない。その大部分は、近藤・土方の実家を始め多摩の支援者に頭を下げて廻り、集めた金だ。

そして訪問先では、口下手の近藤に代わって歯の浮くような世辞も言い、ここでも米搗きバツタの如く頭を下げ、近藤にも下げさせた。

そこまでやって、やっとのことで手にした内定だった。

実力では候補者の誰にも負けるはずがない。そしてやれる事は全てやった。

それなのに・・・

近藤の出自の問題と言われたら、どうしようもない。

はなっから結果は決まっていたんじゃないか。えか。

土方は悔しかった。

所詮勇さんも俺も、武士として世に出ることとは出来ないのか。勇さんを世に出すことは、俺の力では無理なのか。

激しい無力感が土方を襲う。

土方は、がっくりと肩を落としてその場へへたり込みそうになった。しかし、辛うじ堪えた。堪えなければならなかった。その理由、それは隣に座る近藤が、土方の比ではなく、激しく落胆していたからだ。

近藤は打たれ弱い。

土方に比べて反応が遅く緩やかだから、傍目にはまるで何の動揺もなく悠然と構えているように見える。が、その実、酷く傷つきやすい。この度も、手酷く傷つき落ち込んでいた。

土方は、見るも哀れにうなだれる近藤を見つめて溜息をついた。

おそらく明日は道場に出ることすらままならぬだろうぜ。

長い付き合いで、それが手に取るように解るから、土方は自分自身の心のままに落ち込んでなどいられないのだ。

「講武所の剣術教授など、旗本のお坊ちゃん方の棒振り遊びのお相手。近藤勇には役不足だ。この御時世、勇さんに相応しいお役がきつとある。今に、近藤勇でなきやあならねえって塗り駕籠でむかえにくるから」

土方はそんな慰めを近藤に言うことにより、自分も身体と心、両方の体制を立て直すのだった。

「兎も角今日は気晴らしに、おたまちゃんの相手でも・・・」

と、意気消沈する近藤を家族に託して、土方は母屋から、道場奥の住み込み弟子と食客たちにあてがわれた部屋に帰ってきた。

そこではもう、永倉新八と原田左之助が、早くも報せを聞きつけて、台所からくすねて来た酒を、自棄酒と称して飲んでいいる。

どこまで本気の自棄酒か。

土方は少し腹立たしい思いで二人を見た。今回の事、残念に思ってくれてはいると思ふ。しかしこの二人にとっては、それほど深刻な問題ではないだろう。

元々先の事など考えない者たちだ。

講武所の教授になると言うことも、金の入ってくる仕事の一つぐらいいにしか思っていない。それがお流れになっただけ。彼らにとってはそれだけの事なのだろう。酒を飲むいい口実だ。

「まったく、気楽な奴らだ。」

土方は舌打ちした。

土方は、近藤をこの小さな道場の主として燻らせておく気はない。勿論、講武所の教授などで満足すると言うわけではないが、試衛館の道場主から見れば大きな前進であることは確かだった。

この機会を何とかものにせねば。

土方は出来る限りの手を打った。が、その結果は失敗に終わった。

今回は失敗に終わったが、近藤を世に出す。

この計画は諦める気は、土方にはさらさらなかった。今回の原因を考え、ちゃんと省みて新たな道を探さねばならないと思う。思うが、一旦決まりかけた話が流れたのは、近藤の出自の問題だと言う。だとすれば、自分は何をどうすれば良かったのか。正直打つ手は思い浮かばなかった。

近藤は年が明けると三十路を迎える。もう若くない。最早そう悠長に構えてはいられないのだ。

土方は無力感に加え、激しい焦燥感に苛まれていた。

「源さん。俺、勇さんのために何もできない」

土方は、少し離れたところから心配そうに自分を見つめる道場生え抜きの先輩・井上源三郎に、救いを求めるかのように言った。

「歳さんは、よくやってくれた。それはこの誰もがわかってる。また何か機会はあるや」

井上が言った。その言い方は、

「こんな言葉しか掛けられなくて申し訳ない。」

そんな思いが込められているようだ。

若い沖田総司と藤堂平助は、土方と井上のいつもとは違う様子に、永倉・原田の酒盛りに入ることも出来ず、部屋の隅から土方をちらちらと眺めている。

そんな中、土方より少し後れて部屋に入ってきた山南が、土方に近づき耳元で、

「却って良かったと思いますよ」

そう呟いたのだった。

カチン

土方は自分の頭の中で、そんな音が聞こえたような気がした。

「何が、却って良かったんですかー」

自分でも驚く程の勢いで、山南に喰って掛かっていった。

「何もそんなにムキになることはないじゃないですか」

却って良かった。

慰めるつもりで言ったのだろう。

それに対して土方のこの態度だ。

山南は、この男にしては珍しく、ムツと不機嫌さを表に出した。

「この話決めるのに、俺がどんなに走り回ったか、山南さんも知ってるでしょう？それなのにそんなこと、よく言えますね」

さらに言う土方に、

「君が一所懸命になっていたことは、よく知ってますよ」

木で鼻をくくったような言い方になった。

土方はますます頭に来た。

「なんだ、その言い方は！」

「君は、近藤さんを講武所の教授にすれば、それで満足なのですか」

土方激昂するほどに、山南の方は冷静になる。

「それは・・・でも一歩でも進めないと・・・」

「実力第一と言っているながら出自を云々するところに入っても、何も出来ないんじゃないですかね」

「それでも、今の状態よりは……。それじやあ山南さんは、近藤さんをこのままちっぽけな町道場の主で置いといていいと言うんですか」

「誰がそんなことを言いましたか。私は、講武所の教授なんて、近藤さんには役不足だと言っているのです」

「その役不足のお役に就かすことすら、俺には出来なかつた」

今までの勢いとはうって変わって、沈鬱な声で言い、項垂れる土方に、

「それは仕方がない。近藤さんの出自の事を言われたら……。人には出来る事と出来ないことがありますよ」

山南がかけた言葉が、また、土方の神経を逆撫でした。

「俺は役立たずだと言うのか」

今まで以上に激昂する土方に、

「歳さん、やめろ」

土方と山南のやり取りを傍で黙って聞いていた井上が、見かねたように待ったをかけた。

「山南さんは、歳さんのことを氣遣って、言ってくれているんじゃないか。それを……。むしろくしゃりする気持ちは解るが、今、歳さんのやっていることは、八つ当たりだ。子供じみた真似は、いい加減にしろ」

何年ぶりだろうか、本当に久し振りに、井上が土方を叱りつけた。

源さんの言うとおりで。

土方は思った。

山南の言葉が自分のことを氣遣ったのだということ、土方にも解っていた。

解っていたが、腹がたった。

いや、山南に腹が立ったのではない。土方は、自分自身に腹が立っていたのだ。

講武所の剣術の教授の席に空気が出来たと聞いた時、

講武所の教授ぐらいで満足する気はさらさらないが、近藤勇を世に出すきっかけの第一歩としてはこんなのもんで良いか。

それくらい気持ちは良かった。

だが、たかが講武所の教授と甘く見たつもりはない。思いつく手は全て打った。目標の割には菓子折りの中の金、下げる頭の回数がなんと多いことかと思つたほどだ。なのに……。

俺は勇さんを、講武所の教授にすらするところが出来なかつた。

土方は、

自分に対する情けなさ、腹立たしき、

それに近藤に対する申し訳なさ、

そんな気持ちのやり場がなかつた。

そのやり場のない気持ちを、山南相手に爆発させた。

相手は別に誰でも良かった。

いや、違う。

相手が山南だからこそ、土方は爆発したのかもしれない。

山南さんなら受け止めてくれる。

無意識だが、そんな気持ちが働いた。

そして、傍には井上が居る。

度を越したら、源さんが止めてくれる。

これまた、心の奥に持っていた気持ちだ。

そう、土方は山南と井上、年上の二人に甘えたのだ。

子供のように山南に八つ当たりし、そして井上に何年かぶりに叱られた。

俺、何やってんだ。

土方は我に返って、そう思った。

井上の顔を見、山南の顔を見た。

二人とも腹を立てている顔ではない。

二人とも心配そうな顔をしている。

その二つの顔が、四つの目が、土方をじつと見つめていた。

土方は居たたまれなくなって、部屋を飛び出した。部屋を出た土方の耳に、

「すまないな、山南さん。歳さんの奴、気持ちのやり場がないんだ。悪気があつての事じゃない。腹も立つだろうが、堪えてやってくれないか」

山南に謝る井上の声、そしてそれに続いて、「解っていますよ。源さん。土方君の今の気持ちを考えたら・・・。私も少し大人気なかつた。もう少し言い方に気をつけるべきでした」

そう答える山南の声が聞こえていた。悪かった。

土方は出てきた部屋を背に立ち止まった。子供じみたことをした。部屋へ戻って二人に謝るべきだ。そうしなければいけない。

そう思う。そう思うが、どうしても足が部屋の方に向かなかつた。

俺ってなんて情けない奴だ。その場に佇んだまま土方は、心の中で自身を罵った。

風に乗って、梅の花の芳しい香りが微かに漂っていた。

近藤を講武所の教授にと走り回っていたのは晩秋初冬の頃だった。冬の盛りに決まった筈の話が・・・。未練だ。

と思う。が、土方にはその季節の移ろいが何とも空しく感じられた。

不意に肩を叩かれ、土方は振り返った。

そこには、いつから居たのか、先代の道場主・近藤周斎が立っていた。

「先生・・・」

「源三郎に叱られたな」

「聞いていらしたんですか」

「ああ、珍しく源三郎の大きな声が聞こえたから、総司の奴、どんな悪さして源三郎を怒らしたのかと思って部屋の中覗いてみたら、お前だった」

周斎は、そう言って土方の顔を覗き込んで、「十年前の顔に戻っていやがる」

と可笑しそうに笑った。

そういえば、入門したあの頃は、しょっちゅう源さんに叱られていたな。

土方は、一昔前を懐かしく思い出した。

気がつくのと、まだ周斎に顔を覗き込まれたままだ。

「勇さんはどうしてます？」

土方は、照れ隠しに話題を変えた。

「あいつの事はおたまが何とかしてくれるだろうさ。赤ん坊ってものは不思議な力があるらしい。見るも哀れだった勇が、昼寝するおたまの横に座って、ぼおっと寝顔を眺めているなど思っていたら、見る見る穏やかな表情に変わって行った」

周斎は、子をなしたことの無い俺たちにはわからんことだなと、遠くを見てため息をついた。

「そうですか、それは良かった」

近藤の落胆は土方が一番心を痛めるところだった。

周斎の言によれば、近藤は愛娘おたまによって癒され、思いのほか早く立ち直るようだ。土方は、ほっと胸を撫で下ろした。

しかしその反面、近藤が自分とは全く関係のない世界を持っていることに一抹の寂しさを感じ、さらに、土方がある意味生命をかけても望んで止まない『近藤を世に出す』ということが、その世界から近藤を引き離すことになることを思い、

俺が勇さんのためだと思っていることが本当に、勇さんの望むことなのだろうか。いつになく信念が揺らぐ土方だった。

翌日、何事もなかったかのように、当たり前前の試衛館の朝が始まる。

近藤も、愛娘・おたまのお陰か、普段より少し元気がないだけで、いつも通り朝稽古に出て来た。

よかった。

土方は、一安心して、

それにしても、大先生の言うとおりに。おたまちゃんの力はすごいな。

今更のように感心した。

朝稽古が済んで、土方が井戸端で汗を流しているとき、

「今年はお思いの外早く、支払いのめどが立ちましたし、明日は、ゆったりした気持ちで餅が搗けますね」

言いながら、山南がゆつくりと歩いてきた。

山南の言うように、例年大晦日まで土方が頭を悩ます暮れの諸方への支払いだが、今年は珍しく既にめどが立っていた。昨日の事がなかったならば、すつきりさっぱりし何の憂いもなく、明日の餅つきに臨めたはずだ。

「おかげさまで」

土方は場所を空け、釣瓶で水を汲んで山南に渡した。

「ありがとう」

山南は受け取ると、

サブリ

一気に頭から水を被った。物静かな山南のいつもと違う行動に、

「大胆ですね」

土方が微笑った。

「気持ち良いですよ。君もやってみませんか」

「俺は遠慮しときますよ」

これ以上傍に居ると、頭から水をかけられかねない勢いなので、土方は少し井戸端から離れたところにある梅の木に凭れ掛けた。

その梅の木は、一つの枝だけに二、三輪、五分咲き程度の花をつけていた。その花から若やいだ早春の香りが漂う。

山南さん、今日はえらく陽気だな。

まだ井戸端で身体を洗っている山南の姿を見つめ、土方は思った。

昨日の今日だ。俺の事を気遣ってくれているのだろうか。勇さんもおたまちゃんのお陰

か、意外に元気だ。俺も、しっかりしなければ。山南さんに気を使わせていては駄目だな。

土方は大きいため息をついた、

台所へ行く井上が、傍を通った。

「お先に、行ってますよ」

土方は、山南に声をかけて、井上と肩を並べた。

少し歩いて、井上が、山南を振り返って、

「今日は山南さん、えらい陽気だったな」

と小声で囁いた。

「ええ、昨日の事で気を使ってくれてるのかわかって、ありがたいですよ。俺、駄目だなあ、まだまだだなんて・・・」

土方が自嘲気味に言う。

そんなことないよ。

言ってくれると思っていた。しかし・・・。

「ほんと、まだまだだ」

返ってきたのは予想とは違い、そっけない肯定の言葉だった。

「え、ええ、ほんとそうですね」

土方が、がっかりしたように肩を落とす。

その様子を見て、井上がさも可笑しそうに微笑った。

「何でも自分中心に考える。ほんと、まだまだ子供だ。総司と変わらないうぜ。山南さんが昨日の事で歳さんに気を使って、わざと陽気に振舞ってくれてるって？」

「え、違うんですか」

意外そうに自分を見つめる弟弟子に、井上はどう話したものかと言う様子でちよつと間を取ってから話し始めた。

「まあ、十のうち三つくらいは歳さんへの気遣いかもしれないがな。あとは、勇さんのことだよ」

「え、勇さんの？」

「山南さん、俺に嬉しそうに言うんだ。昨日の事、近藤さんは悠然と構えて落ち着いて何も動揺している様子がない。さすが近藤勇だ。自分の見込んだ男だ。ってな」

あ、そうか。そうだったのか。

自分のための気遣いだと感激していた事が、そうではないと解った土方は、何ともばつが悪く照れくさかった。

このまま井上と一緒に行くのは居心地が悪いから、少し遅れて行くか、でも、そうすると、山南が来る。今のこの気持ちで山南と肩を並べて歩くのは、このまま井上と歩いていくよりもっと居心地が悪いだろう。

そんな土方の心の中を知ってか知らずか、井上は土方に顔を近づけてきて耳元で囁いた。

「山南さんは、勇さんの事、知っているようでまだ良く知らないな。悠然と構えて何も動揺していないって？ 傍目にはそう見えるのかね。俺は昨日から、今朝の朝稽古に勇さん、出て来るか心配でならなかったよ」

そして、すました顔で、
「おたまちゃんが生まれていて、本当に良かったよ」
と言いつつ添えた。

「俺達がどんなに元氣付けたって、立ち直るのには、何か講武所の教授に変わる話がなければ、一月はかかったでしょうね」

土方も言う。
「そうともさ。なのに山南さん……。ころつと騙されて」

井上は、可笑しそうに笑った。

「源さん、騙されてってことはないでしょう」

土方も、何か可笑しくなって噴出した。

土方が、ふと真顔に戻った。

うん？

と言うように、井上が土方を見る。

土方は、ためらいがちに話し始めた。

「俺は子供の頃から、勇さんが宮川勝太だった頃、かっちゃんと呼んでた頃から、勇さんを世に出すんだって思ってた。勇さんは大きな仕事をする人だって、いや、俺がさせてみせるって」

訴えるように言う土方に、

知っているよ。

とても言うように井上が大きく頷いた。

「その事がほとんど使命のようになってた。そしてそれは勇さんの望みでもある、そう信じてたんです。でも、本当にそうなんだろうか」

何を言い出したのだろうか。

少し戸惑い気味の井上にかまうことなく土方は続ける。

「勇さんは、俺達とは全く違う世界を持った。俺達のどんな慰めよりも、おたまちゃんの寝顔の方が、何倍も勇さんを慰め元氣付けた。今のまま試衛館の主で終わる人生もありかかって気もして来てるんですよ」

土方がいい終えたところで、台所に入った。沖田と藤堂が七人分の朝餉の膳を並べているところだった。

「ごころうさん」

井上は労って席に着いた。土方への返事は暫くお預けのようだ。

仕方なく土方も席に着いた。

ほどなく、山南、永倉、原田も来て、いつも通り賑やかな朝餉が始まった。

朝餉が済んで、暫く休み午前の稽古が始まった。土方は井上の周りをうろついていたが、井上は何も言ってくれない。

午前中の稽古が済み、

昼餉が済み、

午後の稽古が済み、

夕餉が済んだ。

その間、土方は井上の周りをうろついたり、うろろと纏わりついた、

風呂へ行こうとして外へ出た井上は、付いて来る土方を振り返って、

「歳さん、いい加減してくれ。若い女の子に付回されるんだったら嬉しいが、お前さんに付回されても鬱陶しいだけだ」

うんざりしたように声をかけた。

「今朝歳さんが言った事について何か言えと言うんだったら、無駄だ。歳さんに解らんことが俺に解るわけがない」

「そんな・・・、俺のやっていることが本当に勇さんが望んでいることなのか解らなくなった。源さんしか相談する相手がいないんですよ」

そう言う土方は、何とも情けない。これが道場の運営一切を任されているあの土方歳三とは到底思えない。

「だから俺にそんなこと言ったって・・・」
そこまで言って井上は大きくため息をついた。

何を言っても無駄だと観念したらしい。

「俺が言うことなんか。何の役にも立たないぜ」

そう前置きして、

「近藤勇という男、こんな小さな道場で燻っている男ではない。歳さんや総司や俺だけでなく、山南さんたちが、見込んで集まってきた。本人だつて充分自覚しているよ。講武所の教授方の話だつて充分色気はあった。さもなきやダメになった時あんなに落ち込まない。世に出て仕事がしたいと思ってるんだ。だが自分でそのために動くって事が出来ない人だ。お前さんが傍に居て、あれこれ話を焼いてやらないと駄目なんだよ」

こんなことくらい俺が言わなくても、歳さん自身充分承知しているだろう、そんなら風呂へ生かして貰うよと、踵を返すと、振り向きもせずにさっさと行ってしまった。

土方は、井上の背中が見えなくなるまで見送って、見えなくなっても暫くそこに佇んでいた、

井上が言ったことは井上自身が断ったように、言われなくても土方には解っていることだった。しかしいくら自分で解っているても、他人から言われたい時がある。自分の考えは間違っていないんだと確認したくなる時があるものだ。

有難う源さん。

これでまた俺、勇さんを世に出すために全てをかけられる。

土方は、見えなくなった井上の背中に、心の中でそう呟いた。

年明けを待たずに春を迎えて、もう十日。
夜の梅が芳しく香っていた。